

青年期の人物描画法テストにおける腕の位置について ……………外向性, 協調性, 攻撃性との関係

明治鍼灸大学 人文科学教室
多田 建治

要旨 : 745名の大学生, 専門学校生を被験者として, 青年期の人物描画法テストにおける腕の描き方を調べた。その結果, 13の腕の位置の型と左右の腕の位置が異なる複合型に分類出来た。また, 13の腕の位置の型を5群にまとめ, それを基にして, 「開いている腕を描くの方が, 身体に密着した閉じている腕を描く者よりも, 社会的外向的であり, 協調的であり, 攻撃的であるだろう」という仮説のもとに, Y-G性格検査の Co, Ag, S尺度の得点を5群の間で比較した。その結果, 統計的有意差の生じたものは少なかったが, 社会的外向性と協調性においては, ほゞ仮説どおりの結果がみられた。

Position of the Arms in the Draw-A-Person Test in Adolescence…………… its Relation to Extroversion, Co-operativeness and Aggression

TADA Kenji

Department of the Humanities, Meiji College of Oriental Medicine

Summary: Subjects were 745 university and professional school students. The position of the arms, in other words, how to draw the arms in the Draw-A-Person Test was investigated. Thirteen types of arm positions and combined types of right-and-left arms were found. This study investigated the following hypothesis: the person that draws open arms is more co-operative, more aggressive and more socially extroverted than the person that draws the arms close to the body. The subjects' scores of co-operativeness, aggression and social extroversion scales in the Yatabe-Guilford Personality Inventory were compared among the five groups which were classified according to the 13 types of arm positions. The results were as follows; the hypothesis was almost verified as expected in co-operativeness and social extroversion, but few statistically significant differences were found.

Key Words : 人物描画法テスト Draw-a-person test,
人物描画法テストにおける腕の位置 position of the arms in the Draw-a-person test,
外向性 extroversion, 協調性 co-operativeness, 攻撃性 aggression

I 緒 言

従来、人物描画法テスト (Draw-A-Person Test, 以下, DAPと略記する) において、腕の位置に関して焦点を当てた研究は皆無に等しい。手については、宮川 (1987¹⁾, 1988²⁾ の研究など少数のものが最近試みられている。また、大塚 (1986)³⁾ は、脳血管障害者におけるDAPの分析で、腕と手の分類として、自然におろした腕、腕組、手を腹に当てている、片手を後に隠したものの、両手を後に隠したものの、片手をポケットに入れたもの、両手をポケットに入れたものなど、幾つかの分析項目をあげている。

Machover, K. (1949)⁴⁾ によると、腕と手は、自我の発展と社会的適応に関係するものであり、腕と手によって我々は食べ、着、技能を行ない、身体を探究し、周囲の人と接触する。愛し、愛撫し、傷つけ、殺すなど、破壊し適応するのは腕と手の作用による。個人の環境との接触を決定するのにあたり、腕を配置する方向は重要だと考えられる。一般的に腕の描線の方向と流暢さは、自発的に環境に向かう程度に関係する。しかし体軸と直角に水平方向に伸ばされた腕は、真に環境に向かったの発展とは考えられないと述べている。又、非常に長い腕は強さを欠いている者や、達成や獲得したい野心と結びついたり、女性像で腕を省略する成人男性は、母親から拒否されていたりする感情を表わしている。腕の省略は、分裂病者や極端なうつ状態の人によって、人や物から逃避したいと積極的に考えていることを示したり、罪悪感のような心理的要因が働く場合にも生じると述べている。又、後ろに廻わした手(腕)は環境との交流の乏しさを表わすものとみられている。

深田 (1987)⁵⁾ は、DAPにおける短い腕は意欲が低く、長い腕は成功への意欲を示す。ただし、長すぎる腕は劣等感と支持欲求を示す。一本線や薄く描かれた腕は達成欲求が低く自信を欠いている。折れ曲げられた腕は、拒否、疑い、敵意に通じると述べている。

また高橋 (1980)⁶⁾ は、腕や手は自己防衛や攻撃性、他人との協調性などを象徴すると言ってい

る。そして腕はとくに、被験者が自分の環境内における人や物事を統制したり変化させようとする働きを表わしている。従って、人物画の腕をみる時は、腕が胴から離れて環境に向って伸びているか、胴にきっちりつけられているか、だらりと垂れているか、組み合わされているかなどに注意しなくてはならない。人間関係に順応している被験者は、人物の腕が胴から適度に離れ、柔かみのある様子に描くものである。これに対し、腕が胴から離れ、水平方向以上にまっすぐ伸びている人物画は児童に多いが、これが成人にみられるときは、他の人となめらかに接していけず感情が伴わない浅い接触をする、単純で幼稚な被験者が描きやすい。彼等はまた、どうかすると、自分の攻撃欲求を外界に向けがちである。また、胴にぴったりとつけられた腕を描く被験者は、受動的かつ防衛的な態度が強く硬い性格の人であることが多い。そして胴の前で組んだ腕は、他人に対する疑い深い敵意のある態度を示し、後方に隠した腕は、仲間と妥協できず攻撃的で敵意のある衝動を統制しようとする欲求を表わすといわれている。これはまた、自慰についての罪悪感を示すこともあると述べている。

さらに Gorman, W. (1969)⁷⁾ は、緊張し身体にきちっと付いている腕は厳格さや過剰防衛を暗示する。背中に回した腕は同胞と妥協したくない気持ちを表わす。骨盤の上で交差した腕は骨盤防衛の姿勢を示すが、それはしばしば性的に不適応な人々や、意志で支配できない憂うつ症の人々によって描かれる。上方向へ嘆願の姿勢で伸ばした腕は顕著な依存性を示す。くつろいだ柔軟なかつこうをしている腕はよく適応していることを示唆する。身体から離れて攻撃的に見える腕は環境に対抗して行動しやすいことを暗示し、身体にくついった攻撃的に見える腕は自己に対抗する可能性を暗示すると述べている。

手を出す、手をかりる、手をつなぐ、手をさしのべるなど、日本語のなかに手を用いた言語表現は数多くある。橘 (1982)⁸⁾ を参考にしてそれらを拾い出してみると、手づくり、手をこまねく、

手あたり次第、手をつける、手を組む、手につかない、手を出す、手持無沙汰、手があいている、手ごたえ、手を引く、手塩にかける、手をやく、手を切る、手にかける、手玉にとる、手ぬるい、やり手、手にのせる、手がふさがる、人手のない、手のこんだ、お手あげ、手を抜く、手心がある、手加減、上手、下手、手ぬかりなどがあげられるが、その他にも数多くの言回しが日本語の辞書のなかにみられる。我々の国語（日本語）は、手の言葉のなかに含まれている豊かな人間性のあり方を十分に伝えてくれるものである。

そしてその場合には、手だけでなく腕をも含めた動きが当然のこととして含まれている。つまり、手を出す、手をつなぐなどを例にとると、手の平、指先だけでなく腕全体が他者の方へ伸ばされている状態を表わしているわけであり、手に関する言葉の表現の大部分は腕の部分をも含んでいると考えられる。前述した手を用いた言葉は当然のこと、日本語の手を用いた表現では、手と腕の区別はあまりなくて、そこには、手（hand）のみでなく、腕（arm）も含めた意味で、手という表現を用いていると思う。

手や腕の動きについては、また、非言語的（non-verbal）なコミュニケーションの一つのあり方として、さまざまな手（腕）の動きによるサイン・ランゲージ（sign language）がある。これはきわめて文化的なものであり、聾啞者の手の動きによるサイン・ランゲージは、特別の決められた手の動きの様式がある言語的意味と関連していて、それらを修得することにより、手ぶりによるコミュニケーションが可能となる。さらに、パントマイムにおける身体の動き（手の動きも含めて）による物語（story）の表現や、歌舞伎などにみられる身体の動き、手や腕の動きは、生理的情動的な要因と手（腕）の動きや位置との関連が、多くの人に共通したのものとして捕えられ、身体（手や腕も含めて）の動きから、その人の感情や考えなどの内面的なものを読みとろうとするものである。

橘（1982）⁹⁾ は、手や腕は我々の行動の直接の

道具であり、手または腕のポーズによって、これから環境ととり結ぶ用意があるか、又は、環境に対して一向無関心であるかということが解ると述べている。ポケットに手を入れることは、仕事に対して興味を失った無関心な状態といえるし、又、人と話し合いながらズボンのポケットに手を入れることは相手に対して関心や熱意を失ったことを示すと述べている。さらに、だらりと垂れた手や腕は環境ととり結ぼうとする意図がくじけたことを示すし、緊張して身体の前や腰のあたりにある腕や手は仕事にとりかゝろうとする積極性、或は、ボクサーの戦闘のポーズのように攻撃防禦の姿勢につながる。こぶしを握りしめた手は抑制された攻撃性を示しているだろうし、あごやほゝに当たった手と曲げられてひじをついた腕は、ロダンの「考える人」の彫刻にみられるように、もの思いにふけた考えこんだメランコリーな気分を表すであろう。

Morris, D. (1977)⁹⁾ は文化の中の非言語的（non-verbal）な伝達機能としてのジェスチャー（信号、ディスプレイ、サイン）を世界各国で調査した。そして地域により、同一のしぐさやジェスチャーが異なる意味をもつ場合もあり、また、多くの地域で共通の意味をもつ場合もあることを見出した。その中でとくに腕（手）に関するものをとりあげると、挨拶ディスプレイ（外向性と関連すると思われる）としての、招き手振り、方向を示す誘導サイン（外向性と関連すると思われる）としての人さし指の指示（通常腕がその指示方向へ伸ばされる）、結合サイン（外向性、協調性と関連すると思われる）としての、背中へ手を当てる、握手する、腕を互いに組む、肩に手をのせる、肩を抱く、手をつなぐなどがある。また、勝利のディスプレイとして両手を上げたりして身体を持ち上げる。威嚇信号（攻撃性と関連すると思われる）として、腕を振り上げたり、こぶしを振り上げたりするなどがある。我が国でも野村雅一（1987）¹⁰⁾ によるボディランゲージの研究などがある。

以上、人物画におけるこれまでの腕や手の解釈、

また、手（腕）に関する日本語の表現、ボディランゲージとしての腕（手）の使い方のさまざまな様子などを基にして、腕や手のあり方の意味をまとめると、腕や手のあり方は他者（環境）への積極性（関心）、人間関係での協調性（社会性）、攻撃性（敵意）などを表すものと要約することが出来る。そこで、人物画の描画（青年期以降）にも当然、その腕の描き方に、積極性、協調性、攻撃性などの要因が関連するのではないかと考えられる。

本研究では、「開いている腕を描く者の方が、身体に密着した閉じた腕を描く者よりも、社会的外向性（手をさしのべる、手をかけるなどの言葉に代表される）、協調性（手をつなぐに代表される）、攻撃性（手を出すに代表される）において高得点を示すであろう」という仮説のもとにY-G（矢田部ギルフォード）性格検査の3尺度、Co（協調性）、Ag（攻撃性）、S（社会的外向性）を用いて、青年期の被験者がこれらの特性を示す程度と、DAPにおける腕の位置との関係を調べることを目的とした。また、本研究の結果が青年期のDAPにおける腕の位置のNormative Dataとして寄与することも目的とした。

II 方 法

被験者は、大学生、専門学校生745名、男子532名、女子213名、年齢は青年後期に相当する18～25歳。各被験者にDAP及びY-G性格検査を施行した。（一部の者においてはY-G性格検査は施行していない）。DAPはMachoverの方法で教示を行なった。また、Y-G性格検査は規定の教示により施行した。どちらも集団法で行ない、施行年次は1982～1992年であるが、女子の一部は1976～1982年である。

745名のDAPの結果をもとに腕の位置を分類記号化することを試みた。その分類基準は、表1、図1に示してある。どんなふうにも腕が描かれていても何らかの記号化が可能であるようにし、また、左右の腕の位置が異なる

場合には、左右別々に記号で表わし、その場合には2つの記号を組み合わせた複合型のカテゴリーに分類した。例えば記号DQは人物像の向って左側の腕がDであり、右側の腕がQであることを示す。

DAPの腕の位置の記号をもとに、被験者を群別し、各記号群ごとに、Y-G性格検査の、Co、Ag、Sの三尺度の得点を算出し、平均値、標準偏差を算出した。そして腕の位置とそれらの特性の間の関係を調べた。

III 結果と考察

1) 745名のDAPの結果をもとに腕の位置を分類し、それに該当した人数、及び、全体に対する割合（%）を示したのが表2である。

表2より、DとD+は一応区別しているがよく似た型であり、下に垂れた両腕が胴体から少し離

表1. DAPにおける腕の位置の分類、記号化

○腕が胴体に密着している。		
手が描かれている。		C
手が身体の後ろに隠れている。		Q
手がポケットに入っている。		P
○腕が胴体から離れている。胴の中心線との角度 α が		
$0 \text{度} \leq \alpha < 30 \text{度}$		D
$0 \text{度} \leq \alpha < 30 \text{度}$	手と胴体との距離が拳一個以上ある	D+
$30 \text{度} \leq \alpha < 70 \text{度}$	開いた腕	O
$70 \text{度} \leq \alpha < 110 \text{度}$	水平方向	H
$110 \text{度} \leq \alpha$	上向き	U
○腕が曲げられ、水平方向に腕が伸びる。		
前方に伸びる。		Bf
横に伸びる。		Bs
○腕が曲げられ垂直方向に伸びて、手が身体につく。		
< > 形で腰に両手がつく。		Fa
身体前部に両手がつく。		Fb
身体前部で腕を組む。		Fc
○複合型 左右の腕の位置が異なる 左右それぞれの記号を組み合わせる		
○記号化不可能、その他		

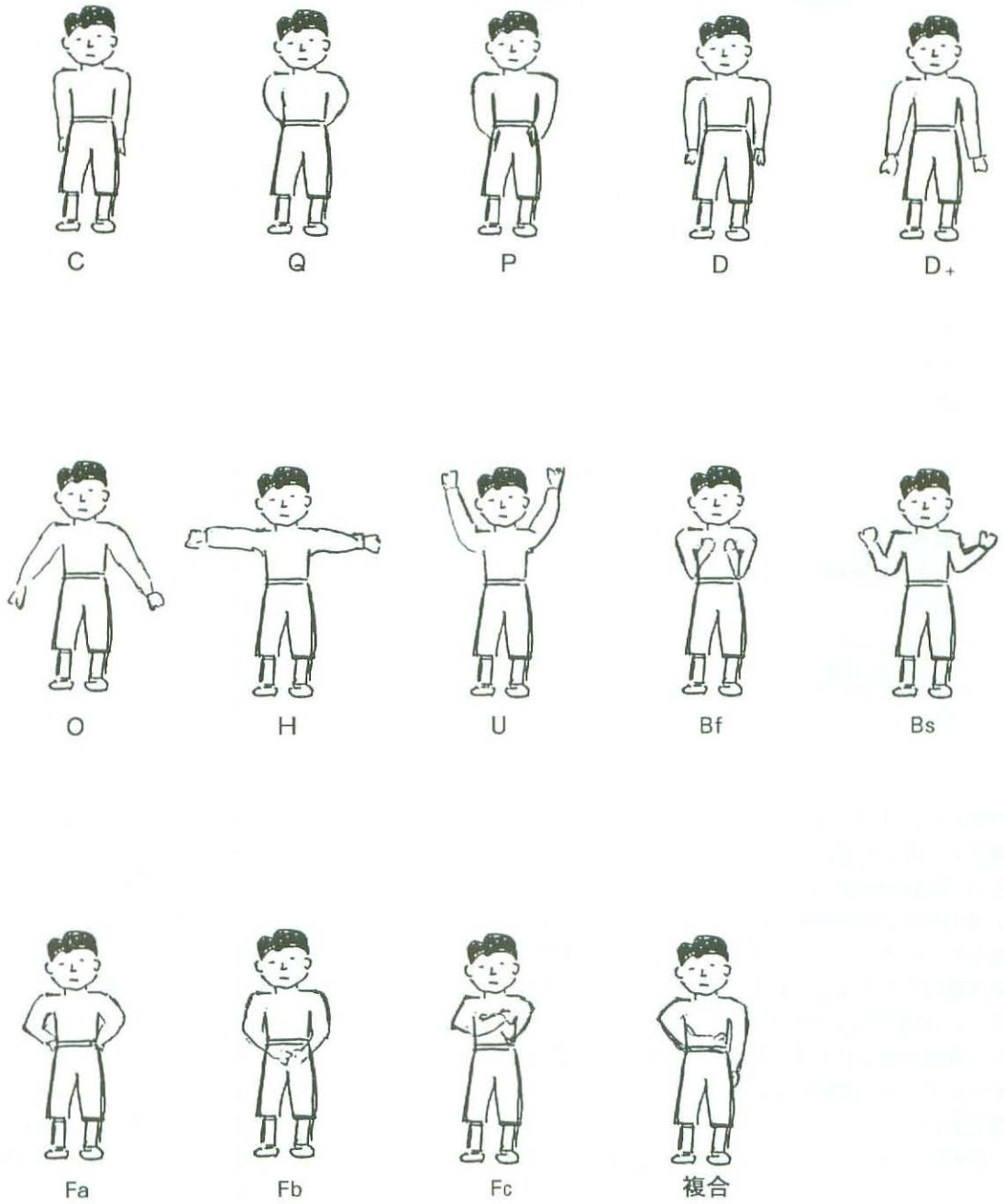


図1. DAPにおける腕の位置の分類と記号

表 2. 被験者745人のDAPにおける腕の位置の分類 () の中は%を示す

分類の記号	全体	男子	女子	χ^2 -検定
C	46(6.2)	22(4.1)	24(11.3)	$p < .01$
Q	84(11.3)	52(9.8)	32(15.0)	$p < .10$
P	35(4.7)	29(5.5)	6(2.8)	
D	140(18.8)	117(22.0)	23(10.8)	$p < .01$
D+	124(16.6)	92(17.3)	32(15.0)	
O	44(5.9)	28(5.3)	16(7.5)	
H	4(0.5)	2(0.4)	2(0.9)	
U	4(0.5)	4(0.8)	0(0.0)	
B f	14(1.9)	11(2.1)	3(1.4)	
B s	5(0.7)	3(0.6)	2(0.9)	
F a	26(3.5)	18(3.4)	8(3.8)	
F b	30(4.0)	12(2.3)	18(8.5)	$p < .01$
F c	8(1.1)	8(1.5)	0(0.0)	
複合型	157(21.1)	111(20.9)	46(21.6)	
あまりに漫画的ロボットの 頭部, 顔のみ	6(0.8)	6(1.1)	0(0.0)	
Stick Figure	4(0.5)	4(0.8)	0(0.0)	
記号化不可能	8(1.1)	7(1.3)	1(0.5)	
計	745(100.0)	532(100.3)	213(100.0)	

れていて, リラックスした, 普通に立っている姿勢でよくみられる, 順応した腕の位置である. DとD+を合わせると全体の35.4%になり約3分の1強の者がこの型の腕を描いている. 人数的にも最も多くの者がこの型の腕を描いているので標準型の腕の型とみなしてもよい. (DとD+の区別は, D+の方が腕の先, すなわち手のあたりで, こぶし一個分の幅より大きく胴体から離れている場合をさしている. 実際にはDとD+の境界あたりの型も多い).

DやD+よりももう少し腕が胴体から離れているOは, 外界に対して開かれた姿勢であり, Morris, D. (1985)¹¹⁾の述べるように, 離れたところから抱いて下さいとばかりに友人を迎える歓迎の姿勢でもある. DやD+よりも幾分力が入っていて攻撃的な意味も含まれる. 当然, 外向性, 協調性と

いう意味に於て, DやD+よりもすぐれている. このOは全体の5.9%にみられた.

一方, 幼児の絵などによくみられるHは, 0.5%で非常に少なかった. またUは, 政治家やフットボールの選手が大好きな勝利のディスプレイである腕上げのジェスチャーにみられるものであるが, 0.5%と非常に少なかった. HもUも緊張度の高い活動的な姿勢であるが, 青年期のデータとして期待したほどには表われなかった.

Cは胴体に密着した腕であり, 他人との関わりに積極的でなく, 硬い防衛的な姿勢である. 攻撃的でない内向的な意味を表わすCは全体の6.2%であった.

QやPは環境に対して無関心で, 外向性や協調性の乏しさ, また, 攻撃性や敵意を抑え統制しようと努力している意味をもつが, Qは全体の11.3

%, Pは4.7%で両者合わせると16%の者にみられた。これらの型は筆者が思っていたよりも多くみられ、現代の青年心理の特徴を表わしていると思われる。

腕を曲げて身体の前方に伸ばす姿勢は複雑であり、手のひらの向きによって様々の意味、攻撃、哀願、拒否などと結びつく。このBfは1.9%で少なかった。手のひらが前方を向く拒否の姿勢はみられなかったが、何らかの物を持っている姿勢とか、ボクシングのポーズのような攻撃的な姿勢の描画はみられた。腕を曲げて身体の側方に伸ばすBsは0.7%で非常に少なく稀な型であった。

上下方向に腕が曲げられて、腰部に手を付けるFaや身体前部に手を付けるFbは、姿勢から言えば、リラックスした休息の姿勢であり、外界へ向かう外向性や攻撃性をば幾分か統制し抑制したものである。従来これらの型の腕に対してDAPの文献は何らの解釈もしていないのでどういう意味があるかは決め難いが、Faは3.5%, Fbは4%みられ、両者合わせてると7.5%の者にみられた。

また身体の前方で腕を組むFcは1.1%であり非

常に少なかった。腕を組むことは明らかに、外界に対する拒否、敵意を表わしているわけであり、他者に対する懐疑をも表わしている。言わば攻撃性、外向性、協調性の陰性の表現だとも言えよう。

さらに左右の腕の位置が異なる複合型は、21.1%と全体の約5分の1にみられた。しかしながらこの複合型は各人によって組み合わせが異なっていて散然とした内訳であった。例えばOとDや、OとHのような組み合わせの場合はその腕の位置の意味が理解出来るが、人数的には無視してもよいほどの少数しか出現していない。左右で極端に異なるQとHのような組み合わせは、その腕の位置の意味を解釈するのが難しい例である。

複合型157名の分類は表3に示したとおりであり、多い組み合わせから言えば、DとPが10名、D+とOが8名、QとFbが8名、DとQ、DとFb、D+とQがそれぞれ7名、D+とBs、D+とFb、CとQがそれぞれ6名ずつである。また左右別みると、PDが6名で最も多く、QD、DFb、D+Q、D+O、D+Bsなどがそれぞれ5名ずつで比較的によくみられた型であるが、複合型は非常

表3 DAPにおける腕の位置が複合型である者157名の内訳

		向かって右腕の型											計	
		D	D+	C	Q	P	O	H	U	Bf	Bs	Fa		Fb
向 か っ て 右 腕 の 型	D			3	2	4			3	1	2	3	5	23
	D+				5	4	5		4	1	5	2	4	30
	C	2	1		2	2		1		1		2		11
	Q	5	2	4				1		1	1		4	18
	P	6									1		3	10
	O	2	3	1				1				2		9
	H					1	2		2					5
	U	1	1		1	1		1		1		2	2	10
	Bf	4	1	2			1	1	1					10
	Bs	2	1	1		1				4		1		10
	Fa	1	2	1	1		2	1	1	1	1			11
	Fb	2	2		4					1		1		10
計	25	13	12	15	13	10	6	11	11	10	13	18	157	

に多くの型に分散していてそれらを幾つかの群にまとめることは難しかった。傾向として少し言えることは、右腕がポケットや身体の後に隠れていて左腕が標準的位置であるとか、右腕が標準的位置であり左腕が身体の前部に当てていたり、開放的になって横の方向に伸びていたりするという左右の組み合わせが幾つかみられている。これらの被験者の利き腕(手)の調査をしていないので確かなことは言えないが、今後の研究の一つの課題でもある。

またこの複合型には、UやH、Bf、Bs、Fa、Fbなどの型が片方の腕にだけ表現され易い傾向がみられた。これらの動きのある腕の位置は、左右対称の腕の位置としては少数の者にしか描かれなかったが、片方だけで左右異なる腕の位置の組み合わせの場合には表現され易いと言えるだろう。

2) 表2よりDAPにおける腕の位置の型の男女差をみると(χ^2 -検定)、Dは男子に於て有意に($P<.01$)多くみられ、CとFbは女子に於て有意に($P<.01$)多くみられた。またQも女子に於て多い傾向($P<.10$)がみられた。

Cは両腕をぴったりと身体に付けたものであり、Qは両腕を身体にくっつけて手を背後にまわすものであり、Fbは両腕を身体の前部にくっつけて手の先が腹部や陰部に付くものである。これら腕の位置を示す姿勢は日常生活場面に於て女子の方に男子より多くみられる姿勢である。言い方を換えれば従来の日本の文化の中で女性らしいあり方としてとらえられる傾向を示す姿勢でもある。そして男女の性役割行動の差が非常に少なくなってきた現代においてさえ、躰とか教育によって、まだまだ男女の姿勢のとりに性差があり、それがDAPに反映されていると思われる。

心理的意味から言えば、Fbは恥らいの姿勢であり、CやQは社会的場面で自己主張を抑制したものであり、これら3つの型をまとめると、自己の欲求や衝動を抑制する姿勢だといえる。緒言で高橋の引用にあるように、Cは自己防衛的な態度を表わし、Qは攻撃的敵意のある衝動を統制しよ

うとする欲求を表わすものである。またMachover, K.によるとQは環境との交流の乏しさを示すものである。

その他に有意差はないが、ポケットに手を入れるPは男子に多くみられ、他者に対して開放的で受容的な態度を示すOは女子に多くみられた。また腕を組むFcは女子には皆無であり男子にのみみられた。腕を肩より上に上げるUも又男子にのみ数名みられ、女子には皆無であった。しかしながら複合型においては女子にも片方の腕だけがUである型が数名みられた。

非常に漫画的あるいはロボットの人物画とみなし得ない描画や、頭部だけ大きく描いたもの、Stick Figureなど教示に背いて描いた者や、記号化が不可能なものを描いた者は、女子では1名のみであったが男子では21名にみられた。これは女子学生の方が課題に真面目にとり組むことや、教示など規則や枠組を遵守しようとする傾向が強いのに対して、男子学生は規則や枠組を破ろうとしたり、奇をてらったり、他人と異った表現しようとする傾向が強いからだと考えられる。

以上のようにDAPの腕の位置の描き方に対して男女差がみられたが、女子の資料では4割に相当するものが10年~16年前の古い資料であるので、そのことも考慮に入れてみるべきである。

3) 次にこの論文の主目的である、DAPの腕の位置とY-G性格検査のCo、Ag、Sの三尺度の得点との関係のみをみる。DAPを描いた被験者は745名いるが、そのうち女子については、Y-G性格検査を受けていない者が多く含まれていることや、検査の施行年次がかなり以前の者が4割も含まれているので、女子については全部除外して男子の資料についてのみ統計処理を行なった。

また男子532名のうち、168名は不適当であり除外した。その内訳は、Y-G性格検査を受けていない者が102名、Y-G性格検査での△印の回答が60以上の者10名、あまりに漫画的ロボットの絵を描いた者6名、2人の人物を描いたり、用紙を横に用いたり、記号化不可能で不適当な者7名、

頭部のみを描いて記号化不可能な者6名, Stick Figureを描いた者4名, その他, 腕は描いているが手を描いていなかったり, 不明瞭なぼんやりした手を描いていたり, 足までの全身像が描かれていない者など33名であった。

従って532名から168名を除いた364名についてDAPの腕の位置の型とY-G性格検査のCo, Ag, Sの三尺度の得点との関係のみをみたわけだが, 364名のうちの82名はDAPの腕の位置の分類が左右で異なる複合型であり, 複合型は一つのある型に相当する人数が非常に少なく統計的に処理をするには不適當であるので, 統計的処理をするための資料として用いたのは282名の結果についてである。

青年期男子282名のDAPの腕の位置を記号化分類し, その各々の群ごとに, Y-G性格検査のCo, Ag, Sの三尺度の得点の平均値と標準偏差を示したのが表4である。

表4をもとに腕の位置の型を整理して次の5つの群に分けた。

- I群 (O, H, U) …両腕が身体からかなり離れている群
- II群 (D, D+) …両腕が身体から少し離れている群
- III群 (C, Q, P) …両腕が身体に密着している群
- IV群 (Bf, Bs) …両腕が肘で折れ曲っていて, 水平方向(前方, 側方)に伸びている群
- V群 (Fa, Fb, Fc) …両腕が肘で折れ曲っていて, 垂直方向(下方)に伸びている。また手は身体にくっついている群

そしてその5つの群ごとにY-G性格検査のCo, Ag, Sの三尺度の平均値と標準偏差を示したのが表5である。

本稿の仮説からすれば, 「I群の方がII群より, II群の方がIII群より, より協調的であり, 攻撃的であり, 社会的に外向的である。また, IV群はI群に近く, V群はIII群に近い」という考えであるので, Co, Ag, Sのそれぞれの尺度において, 5つの群の各群どおしのt-検定(片側検定)を行った。その結果は表5に示してある。

表5のt-検定の結果から, S尺度において, I-V群間と, II-V群間に $P < .05$ の有意差がみられた。また, Co尺度において, I-V群間と, I-III群間に $P < .10$ の差の傾向がみられた。統計的有意差がみられたのは少しかつであったが, 各群の平均値を比較すると, S尺度とCo尺度においては, I群, II群, III群の順に社会的外向的であり, 協調的であるという結果がみられる。また, IV群はII群に近く, V群はIII群より外向的でなく協調的でないという結果である。そしてこの結果は本論文の仮説とほぼ一致している。一方, Ag尺度においては, I群が最も攻撃性が高く, V群は攻撃性が低い。そしてIII群は攻撃性が2番目に高く, とくに表4からみてCの型の攻撃性の得点が高いのと, IV群の攻撃性が最も

表4 腕の位置の型各群におけるY-G検査3尺度の得点の平均値と標準偏差

	人数	Co		Ag		S	
		M	σ	M	σ	M	σ
D	84	7.74	(4.03)	11.38	(3.95)	12.64	(5.09)
D+	60	6.50	(3.79)	11.47	(4.20)	14.15	(4.66)
C	14	7.86	(3.86)	13.36	(3.23)	12.64	(5.32)
Q	34	7.59	(4.32)	11.50	(2.79)	12.71	(5.47)
P	25	7.72	(2.95)	11.20	(3.83)	12.56	(4.83)
O	19	6.53	(3.97)	12.00	(3.92)	13.21	(4.15)
H	1	7.00	(0.00)	18.00	(0.00)	14.00	(0.00)
U	4	5.75	(2.86)	11.25	(1.09)	15.00	(5.43)
Bf	9	6.00	(3.16)	10.67	(2.93)	13.44	(4.13)
Bs	3	11.00	(0.82)	11.00	(5.66)	12.67	(2.34)
Fa	12	6.58	(4.81)	10.83	(4.13)	11.25	(4.15)
Fb	11	8.27	(3.63)	10.09	(4.25)	11.82	(4.21)
Fc	6	11.17	(2.18)	12.83	(1.97)	10.67	(5.82)

表5 腕の位置の型(5群に分類)とY-G検査3尺度の得点との関係

	人数	Co	Ag	S
I群 O, H, U	24	M 6.42 σ (3.73)	12.13 (3.72)	13.54 (4.36)
II群 D, D ₊	144	M 7.22 σ (3.99)	11.42 (4.05)	13.27 (4.97)
III群 C, Q, P	73	M 7.69 σ (3.80)	11.75 (3.37)	12.64 (5.24)
IV群 Bf, Bs	12	M 7.25 σ (3.52)	10.75 (3.81)	13.25 (3.77)
V群 Fa, Fb, Fc	29	M 8.17 σ (4.30)	10.97 (3.95)	11.35 (4.58)
t-検定		I-V, $p < 0.10$ I-III, $p < 0.10$		I-V, $p < 0.05$ II-V, $p < 0.05$

低いのは仮説と反対の結果である。

表4からもう少し詳しく個々の型についてみると、Bfは(人数が少ないが)非常に協調的で外向性が高い。これはBfの腕を曲げて前方に伸ばしている姿勢のもつ意味と非常に合致している。ただ攻撃性が低いのは合致していない。腕を組むFcは(人数が少ないが)協調性が最も低く、外向性も最も低い。また攻撃性は2番目に高い。外界に対する敵意や拒否を示す腕を組む姿勢のもつ意味と合致している。

人数が少ないがUは最も協調的であり最も外向的である。仮説やボディ・ランゲージの意味からすればOの方がUよりも協調的であり外向的であるべきなのだが、この点に関しては意外な結果であった。ただし以上のBfやFcやUは人数が少ないのでこれらの結果から明確なことは言えない。

4) DAPにおける腕の位置の問題を考える場合、二枚目(用紙の裏側)に描かれた人物像の腕の位置が一枚目(表側)に描かれた人物像の腕の位置

と異なる場合がしばしば生じている。本研究の資料としては、DAPの一枚目(表側)に描かれた人物像をのみとりあげた。DAPは通常、二枚目(用紙の裏側)に表側とは異なる性の人物像を描くように要求され教示される。

そこで結果3の被験者の男子364名について、二枚目(裏側)に描かれた表側と性の異なる人物描画における腕の位置を分類、記号化し、それらが一枚目(表側)のものと同じか異なるかを調べてみた。その結果、完全に記号が一致したものが

87名、また、DとD₊のように多少異なるがほぼ類似したものが13名であり、364名のうち100名が同じような腕を二枚目(裏側)にも描いていた。一方、記号が完全に異なるもの(片腕の記号が異なる場合も含めて)が175名みられた。そして残りは、横向き像のため異同が判別しがたいものが6名、手まで描いていないものが32名、二枚目(裏側)の人物像を描いていないか、時間の関係で身体の一部しか描いていないものが51名であった。この結果を要約すると、二枚目(裏側)に描かれた人物像の腕の位置は、一枚目(表側)に描かれた人物像の腕の位置とは異なる場合の方が多く、275名中、175名(64%)の者が何らかの形で異なる腕の位置を描画していたことになる。

異なる性の人物像において、身体の特定の部分に変化して描かれるという点については、従来何らのアプローチもなされていないし、この結果をどう解釈してよいのかは筆者にはわからない。非常に大きな心理的な問題と関係するかもしれないし、その問題に対処していくことも難しいかもし

れない。ただ、筆者の考えでは、二枚目（裏側）に一枚目（表側）と全く同じような人物像（もちろん男女の違いはあるが）を描く者は、多分に、精神遅滞児の絵画の特徴でもある性格の硬さ（rigidity）のようなものを表わすのではないかと考えられる。また良く言えば、性格の安定性、一貫性を示すとも考えられる。また、Machoverの記述に関連して言えば、心の深層にあるものを描画に投影することを抵抗し、防衛しているとも考えられる。しかしながら、これらの言及についての確証はない。

文 献

- 1) 宮川治樹：描画法の研究（Ⅰ）…人物画，手部の質的分類，日本教育心理学会第29回総会発表論文集，552～553，1987.
- 2) 宮川治樹：描画法の研究（Ⅱ）…描画特徴の安定性，日本教育心理学会第30回総会発表論文集，892～893，1988.
- 3) 大塚恭子：脳血管障害者における人物画特徴，日本心理学会第50回大会発表論文集，760，1986.
- 4) Machover K : Personality Projection in the Drawing of the Human Figure. C. C. Thomas, 1949. (深田尚彦訳：人物画への性格投影，第4刷 黎明書房，名古屋，1979)
- 5) 深田尚彦：人物画テスト，家族画研究会編：臨床描画研究Ⅰ，描画テストの読み方，第2刷，金剛出版，東京：12～32，1987.
- 6) 高橋雅春：描画テスト入門—H T P テスト，第5刷，文教書院，東京：102～104，1980.
- 7) Gorman W : Body Image and the Image of the Brain, 1969. (村山久美子訳：ボディ・イメージ—心の目でみるからだと脳，第3刷，誠信書房，東京，1986)
- 8) 橘 覚勝：手—その知恵と性格，新装版第1刷，誠信書房，東京，1982.
- 9) Morris D : Manwatching, 1977. (藤田統訳：マンウォッチング，第14刷，小学館，東京，1988)
- 10) 野村雅一：ボディランゲージを読む—身ぶり空間の文化，第4刷，平凡社，東京，1987.
- 11) Morris D : Bodywatching, 1985. (藤田統訳：ボディウォッチング，第2刷，小学館，東京，1992)